
遺産相続

岡村 としあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遺産相続

【Nコード】
N5850T

【作者名】
岡村 としあき

【あらすじ】
フリーター23歳。男。正社員。第二新卒歓迎。未経験可。
求職活動の末に男がつかむものとは？

(前書き)

内容そのものを2、3時間程度で考えたものですから、見苦しい部分も

あるかと思います。小説自体はまだまだ経験がございませんのでぜひとも、感想をお寄せください。

その日、大手医療機器メーカーの会長が都内の病院で亡くなった。そんなニュースを右から左に受け流し、俺はカップラーメンをすすする。

日本経済を裏で牛耳っていたとか、政界への発言力がどうか。フリーターの俺には関係ない。

テレビでは、頭のハゲた偉そうなおっさんがなにやら喚いていた。俺は明日の生活費を確認すべく、財布の中をまさぐった。

野口英世のヒゲ面が出てきた、あとは役にも立たないスーパーのレシートが何枚か……。

時間帯はどれも19時を回っている。

19時からスーパーで半額セールがある。

俺はスーパーの肉売り場でバイトをしているので、こっそり半額シールを拝借し、目当ての商品に貼り付け、それを棚の奥に押し込んでおく。

バイト帰りにそれを回収し、家に帰って晩飯にする。

今夜は豚のしょうが焼きだ。

バレたらクビになるかもしれない。

かまうものか、生活がかかっているんだ。バレたらまた次のバイトをみつけるまでだ。

この生活を始めて一年と二ヶ月。三流私立大を卒業したはいいの就職できず、派遣とバイトで生活費をやりくりする日々。

親のスネをかじりたい所だが、あいにくかじるスネはない。先客がいるからだ。

自宅警備員の兄がネットゲ廃人になってごろごろ。

養豚場から出荷されたんじゃないかと思うくらいの豚になって。

正直、豚を見るのはバイト先だけで十分だ。

それを考えると、とても家に帰って親の世話になるわけにもいか

ない。

なんとか就職して、生活にゆとりをもたせたい。

俺は兄貴とは違うんだ、明日の派遣に遅れないように早めに布団にもぐりこんだ。

それから数日が過ぎ、ネットの就職支援サイトで先日の手医療機器メーカーの求人があった。

正社員。第二新卒歓迎。未経験可。

すぐに応募した。その日の夕方には書類審査の返事が返ってきた。焦る気持ちを抑えて、書類選考の結果をクリックする。

「ご応募ありがとうございます。」

弊社にて慎重に審査致しましたところ、貴意に沿いかねる結果となりました」

「やっぱりな」

落胆の気持ちを隠せないでいた俺は焼酎をコップに注ぎ、飲み干して寝た。

次の日、それは突然やってきた。

例の大手医療機器メーカーからだった。

別職種での求人ならばあるが、そちらでならどうか。というものだ。

何でも、新部署を立ち上げるらしくその人員が手薄らしい。

俺は元気よく返事をし、あさっての面接に備えることになった。履歴書はいつ面接が来てもいいようにあらかじめ用意してある。大急ぎで髪を切りに散髪屋へ。

その帰りに履歴書用の写真をバイト先のスーパーで撮った。

当日。本社ビルの前で緊張に緊張しまくっていた俺は喉がカラカ

ラのまま面接に挑んだ。

親指だけをポケットに入れる。緊張した時に出るクセだ。

こうするとなぜか落ち着く。気持ちを落ち着かせると自動ドアをくぐり受付へと向った。

受付のお姉さんはキレイな人だった、こんな人に朝のあいさつをしてもらえば俺は一日元気に働けるだろう。

「人事部の阿部 光明です」

の一言で、現実に戻され面接が始まった。

自己PRとか志望動機をあらかじめ何度もイメトレしていたおかげでスラスラと滞りなく面接は進んだ。

「ご家族は？」

その言葉に一瞬凍りついた。

家庭環境も調査されるのだろうか？

だが、素直に答えることにした。

「最後に何か質問はありますか？」

「あ、ああ。この近くでおいしいランチのお店、ありますか？」

動揺してしまっていたのだろう。もう少しマシな質問をするべきだった。

「駅前のイタリアンのお店は安くてオシャレだと、女性社員に評判ですよ」

面接官は笑顔で答えてくれた。

それから、どうやって帰宅したか覚えていない。

面接でスベった事があまりにもショックだったからだ。

「あれは落ちたな……」

家に帰った俺は、焼酎をいつもより多めに飲み干した。

嫌な事は忘れてしまおう。

ふとP Cを立ち上げ、WEB小説を読んでいたら携帯がブルった。
「企業からメッセージが届いています?」

どうせ、今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。とか書いて
んだろ?

どうでもいいと思いつつもサイトを開き、メッセージをチェック
する。

「マジか……」

翌週の月曜日。俺はスーツに身を包み、本社ビルの前にいた。

来月からの入社に関する事前面談だ。

親指だけをポケットに入れる。また、緊張してしまっているらしい。

突然の出来事にまだ俺も半信半疑なのだ。

覚悟を決め、自動ドアをくぐった。

受付のお姉さんに名前を告げ、取り次いでもらう。

カップラーメンが食べごろの時間くらいに部屋に案内された。

「おはようございます」

先日の面接官がにこやかに扉をあけてくれた。

「失礼します」

席に座ると、いろいろと書類のヤマが俺を出迎えた。

面接官に言われるまま、書類を記入し終わると社内を見学する事
になった。

オフィスからは電話の音やキーボードを叩く音が聞こえてくる。

来月から俺もここで働くんだ。

そう思うと、何か胸の奥から熱いものがこみあげてきた。

最後に案内されたのは地下だった。

「ここは我が社でも幹部クラスの間人しか立ち入ることを許されて
いないんですよ」

何故そんな場所に俺を? 新部署設立と何か関係があるのだろうか?

面接官は薄暗い室内に入っていくと、壁伝いに電源を探しだした。妙な空気に包まれたそこには何かの気配があった。

暗闇を手探りで進むと、何かに遮られそれ以上進むことはできない。

スイッチが入る。闇が息の根を止めると目の前には巨大な水槽があった。

「あの？　これは……？」

すぐ後ろで固くて重い音がした。

面接官が扉を閉めたようだ。

「驚かせてしまいましたか？　ここは機密の塊なのでしっかりと施錠しなくてはいけないですよ」

面接官がゆっくりと水槽に向かい、水槽の電源を入れた。

そこには……全裸の老人がいた。

頭髮はなく、何かの映画で見たようなマスクで口を覆っている。

「あの、なんですか？　これ？」

面接官はにっこりと微笑み。

「お帰りなさい。半年振りにお戻りになられましたね」

さつきとは違う笑顔だ……まるで……。

「半年間。実に長かったですね。でも、もう大丈夫。最後の処理をしましょう。お父さん」

お父さん。面接官はそう言うと言の首筋にスタンガンを押し付け、気絶させた。

医者から死亡宣告を受けたのはもう、一年も前のことだ。私は助からない。らしい。

70数年生きてきたこの人生もようやく終わりか。

だが、まだ死ぬわけにはいかない。

今、私がいなくなったらこの会社はおしまいだ。

後継者たる光明はまだまだ上に立つには未熟すぎる。

まだ私は生きなければならぬ。

そこで、私は思いついた。

私が若返ればいいのだ。若くて、健康な体を手に入れば光明に会社を任せることも無い。

私が支配していける。

人間の記憶の交換。技術者に命じて作らせて見た。

失敗だ。モルモットになった人間は自分が誰なのかわからない。

多重人格になり、記憶が混濁する。

そこで、半年の期間をもうけ徐々に記憶を入れ替える事にした。

今度は成功だった。

さっそく、活きのいい若い人間を光明に命じ探させた。

新部署の設立というエサをまいたらしい。

この不況だ。求人を出せば、わんさと人はやってくるだろう。

そして、目当ての物がきた。

都内に住む、大学出たてのひよっこらしい。

私は目を覚ました。実に気分がいい。自分の足で立ち。自分の口で呼吸をする。

私は新しい人生を手にしたのだ。

私が70数年築き上げたてきた物は余すことなく、新しい「私」が相続する。

私が私であるという記憶を含めて。

記憶の交換は成功した。今、水槽に入っているのは「彼」だ。

水槽の生命維持装置の電源を切ると、私は部屋を後にした。

光明たち重役に顔を見せる為、私は会議室に向う。

この件は光明しか知らない。私は前会長の遺言によってこの会社の後継者に指名されたという事になっている。

シナリオは決まっているとはいえ、緊張する。

親指だけをポケットに入れる。緊張した時に出るクセだ。

まだ、俺は生きている。私として。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5850t/>

遺産相続

2011年6月30日03時28分発行